

27

呉秀三はなぜ「乳巖治験録」を改竄し、 合成写真を作ったのか

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

呉秀三は1923年に「華岡青洲先生及其外科」を出版した。青洲に関する初めての本格的伝記である。青洲の系譜、学統、業績、著述、門人、漢詩集を網羅しており、以来100年経過した現在に至っても、これを凌駕する伝記は上梓されていない。この著が完璧であると評価されたために、後続の研究者たちは青洲についてのさらなる研究を断念して、ひたすらその現代語訳に取り組むようになった。1964年の森慶三ら編の「医聖 華岡青洲」は、若干の新知見を取めているが、殆ど呉の著の現代日本語訳と称しても過言ではなく、1972年の藤本篤らの「華岡青洲」、1999年の上山英明の「華岡青洲先生 その業績とひととなり」は何れも呉の著の現代語抄録と称してよい。このように後続の研究者が何れも原典を十分に参考にしなかったために、呉の著の重大な問題点を指摘できなかった。しかし、青洲が自ら著書を上梓しなかったことが諸問題の根源的原因である。

呉の著の抱える深刻な問題は、最も重要とされる史料「乳巖治験録」を改竄して復刻し、その合成写真を作ったことであろう。具体的に示そう。3丁裏の第2行「我長門独嘯□（「疔」に「奄」の字）を呉は「我長門独嘯庵」と訂正して復刻し、同様に「方伎」を「方伎」、第5行の「亂岩」を「乳岩」と訂正した。史料は飽くまでも原文通りに復刻し、注において誤りを指摘すべきである。呉は「乳巖治験録」を青洲の自筆と誤解した。医師であれば当然知っているはずの漢字を青洲が誤ったと誤解し、名誉に関わると考えて訂正したのである。さらに、呉は「乳巖治験録」の一部を4枚の写真にして示したが、その内の2枚は合成した写真であった。呉の写真「第三百七乙」は「乳巖治験録」の4丁表の後半の5行と4丁裏の最初の2行を合わせて1枚の写真とし、呉の写真「第三百七丁」は7丁表の最後の2行と7丁裏の全4行を合わせて1枚の写真としたものであった。何れも比較的誤りがなく、綺麗に書写された部分を選んで1枚の写真に仕上げたものであった。「乳巖治験録」が丁寧に書写された写本であることを印象づけようとした意図が窺われる。

呉はこれより5年前に「東洞全集」を編集した。この中で呉は吉益東洞の医説を詳細に論じている。したがって呉は青洲の医の思想の殆どが東洞の医説に準拠したものであることを十分に理解したはずである。ところが呉はこのことに一切言及しなかった。青洲の思想が東洞の医説の二番煎じでは、その名誉に差し障りのあると考えたからであろう。

青洲の曾孫貞次郎は1920年に和歌山赤十字病院の前島惇二と共に呉を訪れて青洲の伝の執筆を懇請した。呉がこの年に「華岡青洲先生伝」を「医人」に発表して青洲研究の第一人者であったからである。訪問時期は呉の海外出張時期を考慮すれば3月の後半から4月初めにかけてであろう。この年は青洲の回忌など特別な年ではなかったので、何か特別な懇請の理由があったはずである。貞次郎は「戦後恐慌」のために事業に蹉跌を来していた。その原因の一端は先祖供養の不備にもあると考えて、供養・回向の意味を込めて青洲の伝の執筆を依頼したものと考えられる。このため呉は蒼惶の間に本書を完成しなければならなかった。執筆を開始したのが1920年11月末で翌年3月には草稿が完成しているから約4カ月で仕上げたことになる。余りにも急いだため呉は種々誤りを犯した。その一つは「乳巖治験録」を青洲の自筆と誤ったことであった。このために上述した問題を引き起こしたのである。「華岡青洲先生及其外科」は供養・回向の書であるから故人の名誉に差し障りがあることは書けない。呉が「乳巖治験録」を改竄して復刻し、合成写真を作った理由もこうして初めて理解できる。貞次郎の切なる願い、そして呉の努力の甲斐も空しく、「華岡青洲先生及其外科」が上梓されて2カ月後の1923年10月に華岡家の家屋敷は競売に付された。